

論 説 報 告

現代に於ける都邑計畫の動向

正会員 石 田 荣 七 男*

I 結論

- II 都邑計畫の歴史的變遷
- III 現代都邑計畫の主流
 - 1. 都市の防衛
 - 2. 田園都市論
 - 3. ジードルング

内 容

- 4. 都市分散論
- 5. 立地論
- 6. 自給自足論
- 7. 生活計畫
- 8. 緑地論

VI 結語

幕府の大政奉還、諸侯藩籍奉還、廢藩置縣、西歐文化の移入等は之又根本的に都市構成要素を變貌せしめ從つて觀念的にも形態にも、都市は著しくその趣を異にするに至つた。以下近世都市發展の様相、動向につき通俗的、普遍的乍ら斷片的解剖を試みた。

II 都邑計畫の歴史的變遷

諸論に於て都市の形態的變貌の一片を述べたが次に都市變革史上考へられる內容的或ひは思想的、理論的、觀念的變遷過程を擧げるならば大要次の様な事が考へられるであらう。

(イ) 城塞都市より自由開放的自治都市への變遷

(ロ) 美麗都市より現實的實用都市への移行

(ハ) 密集都市形態より分散都市形態への轉位

大都市論より小都市論へ

田園都市論

衛星都市論

農村計畫

工業の分散

ジードルング

{ 工業 ジードルング }

{ 農業 ジードルング }

(二) 局地計畫より綜合計畫へ

立地論

地方計畫

國土計畫

I 緒 論

古來都市は幾多の變遷過程を辿つた。單純な個々の聚落的形態より除々に聯繫的複雜性を加へて變貌した。或ひは其時代の思想的、經濟的、文化的、學術的、藝術的、政治的洗禮を受けつゝ進歩し、停頓し、或ひは退歩し、飛躍し、兎に角時代と共に都市は移り變つて來た。ヨーロッパに其況を取るならば西暦前三千年エジプトに都市文化が發生したと言はれる。ギリシャ、ローマ、アテネの文化はそれよりもずつと遅れ西暦前六百年頃より發達した。その時代の都市に於ては側へばギリシヤ都市にてはAgora(大市場)、ローマ都市にてはForum(會堂)等を都心とした直線的街道整然たるものであつた。ローマ帝國没落後數世紀の間は所謂戰亂時代で都市は不衛生な、雜然たる發展を余儀なくせしめられたのであるが獨り城塞、城壁已是著しく發達し都市の武力防衛的城塞都市を現出せしめたのである。その後文化的に、都邑計畫的に最も顯著なる變革をその都市を追つたものに十五六世紀に於ける文藝復興がある。都市に文化的、藝術的清潔の芽生えたのも實にこれよりである。この様に都市は常に歴史的文化の代表者であり又文化の創造者的役割をも常に擔當し來たつたのである。

日本に於ても大化の改新による班田收授の法、區分田等の諸政策は一種の農村計畫であり、國土計畫の一分野でもあると看へる、鎌倉幕府の創設、武家政治の起源は必然的に城下町的都市形態の發達を促し、明治維新徳川

(+) 平面計画より内容計画へ

地域制、地区制

自給自足觀念の擡頭

生活計画

(←) 高度國防國家體制の確立

防空都市

大略以上の様な事が考へられる。其内容的個々に亘つての説明は割愛するが、只一つ都市發展の歴史的變遷に於て吾人は戦争と文化との宿命的な關聯性を見逃す事は出来ない。

古代自然發生的都市を形態的に整備したのは實に自己防衛的觀念に基いた防塞都市であつた。然して又二十世紀の現在都邑計画の最も大きな目標であり、大いなる悩みも又實に國土の、都市の防衛的觀念である。前者は單純な、平面的武力的防衛理念であり、後者は複雑な、立體的、多面的、國家總力戰的色彩を帶びてゐるに過ぎない。戦争は文化の破壊者であると共に又文化的建設者でもある。世界史上人類は完全に静謐な時間を果して幾時間持ち得たであらうか。そこに戦争の文化に負はされた宿命的な負託があるのである。

■ 現代都邑計画の主流

現代都邑計画理念の根本を流れる主なる傾向、特長と言つた様なものについてその内容を概念的、抽象的な難把なものではあるが一應解説して見よう。

1. 都市の防衛

戦闘兵器の進歩、科學の進展は徹底的に都市にその變革を迫りつゝある。その昔平面的にその都市を外敵より防衛するにはその城塞は絶対的なものであつた、萬里の長城はその防禦の顯著なる例である。然し物質文明の發達、機械、科學の進歩は益々その戦闘行爲を複雑にし多角的なものとした。航空機精能の進歩、航續距離の増大、落下傘部隊の活躍等は益々都市防衛の多角性と複雑性に拍車を加へその困難の度を深めた。積極防空、消極防空と言ひ都市機関の多元的編成と言ひ、都心の分散と言ひ現今盛んに提倡せられ又實行に移されてゐる政策、施設は大概ね大かれ少なかれその自體防衛的觀念より發足してゐる。

戦争が永遠に終息せざる限り人類は將來共此問題より解放せられる事はないであらう。

2. 田園都市論

田園都市論は所謂大都市論に對する反逆とも見れる。

都市の持つ文化的魅惑と農村の持つ清淨なる環境とを併せ持たせようとする所にその狙ひがある。それは十九世紀初期英人ハワードによつて提倡せられ、ロンドン郊外レッチワースにそのモデルが作られたに始まる。此田園的な都市、都市的な農村は充分にその時代の嗜好に適した。そこには過大都市現象の如き末期的症狀もなく、都市生活者は豊饒なる綠野に圍まれられ、充分に保健的な、厚生的な環境と高速度交通機關により充分に文化的雰囲氣をも涵養し得、生活と仕事との完全なる分離と秩序とが得られたのである、此理念は衛星都市論、防空都市論、立地論等とも密接なる關聯性を持つものである。

3. ジードルング

これは一園地の住計画の謂ひである。或ひは工業を主とし、或ひは農業を主とする事によつて工業ジードルング、農業ジードルングの稱がある。

之勿論保健的な文化的快的な住計画の表現ではあるが又一種の交通對策的な役割をも分擔してゐるのである。

即ち大都市往來の大部分はその工場地と住宅地とを出発目に且つ不合理に配列させておく事から生ずる一種の病的現象であるとなし、それ等の交通難、過大交通量は工場と住宅地との適正部分により或程度避け得られるものとしてゐる。これは又都市と農村との人口的「バランス」と言ふ事からも検討せられた。

農村に於ける離村向都の流行は益々都市の交通難、住宅難、就職難、生活難を激化せしめ社會不安の根底を築くに至つた。又質實剛健なる農民の確保は只單なる生産部面のみの問題では無くして思想的にも、社會的にも、國家の生存的にも、重要な意義を有するものである。富國強兵の最良策として既に百七十年前ドイツ統一の野望に燃える若きフリードリッヒ大王がこの定住事業なるものを強行した。農民の保護、その地位の向上政策によりその擔稅力は著しく増大し、從つて人口增加率の向上と

もあり、兵力の整備のみならず國富の増加にも偉大なる貢献を爲した。ブロイセンがヨーロッパ強國に位するに至つた理由はもとより大王の征服事業に依るであらうがより以上にその適切なる治政の賜であるとされてゐる。國民經濟學の始祖フリードリッヒ・リストも「寧ろその農業、工業及び商業の聰明な獎勵策ならびに文學や科學の進歩の結果である」と述べてゐる。

4. 都市分散論

産業革命以後に於ける機械分明、資本主義經濟は必然的に工場の簇生、進出を促した。之等工場は都市内に、或ひは都市周邊に集中し都市の重要な構成要素となつた。これら工場は多數の労働者を都市に送り込み、都市を困惑せしめ、正に攪亂せしめたとも言へる。従つて工場の都市外への分散の必要性が痛切となつてきた。之は又防空上よりも強く要請せられ獨り工場のみに限らず、總ゆる都市機能の分散と言ふ事が必要となつてきた。こゝで意味する分散は既設の施設の移轉は勿論であるが、新しく進出せんとするものの事前の配置計畫も勿論意味するのである。しかも其分散は機能の只單なる分散のみではなく、分散せしめられた各個々は個々としての独自の獨立性と開拓性とを持たねばならぬとせられ、その個々は有機的に、又多元的に都市機能に強烈に結びついて居なければならぬ、そしてそれ等はあくまで都市機能の、都市構成の一部であらわばならぬとされてゐる。此様な理念に基き都市は複数の細胞に分割され機能的に或ひは形態的に分散體形を見るに至つた。

或ひは田園都市論の如き形となり、或ひは衛星都市論となり、具體的に都市計畫者に幾多の問題を提供した。

(イ) 衛星都市論

形態的には太陽圈に於ける太陽の周りの衛星の様に、母市を中心としてその勢力圏内に幾多の小都市が附帯してゐる状態である。それ等小都市は縁地区により完全に母市より隔離せられ、母市の擴大につれそのまま其中に包含編入せられる様な事の無い様勘案せられてゐるのである。而も高速度交通機器等により密接に母市に結びつけられ、殆んど母市内の市民同様にその都市文化を吸收享受し得るのである。その目途とする所は田園都市に於

けるか如く、最も保健的にして而も文化的、快的なる住計畫の具現である。

(ロ) 小都市論

次に都市の分散とその目的を一にするものに小都市論がある。都市の分散を必要としない程度の適正なる大きさの都市を始めから計畫するのである。その所謂適正都市には過大都市現象の如き動脈硬化症、尿毒症的状況もなく、職場と住居と生活と言ふものの間に間隙も摩擦もなく、文化の潤ひと生活の樂しみとが満ち満ちてゐると言ふのである。その様な適正都市の大きさは各々學者によつて意見異々ではあるが、フェーダー教授は二萬人都市を提倡し、又都市計畫東京地方委員會石川技師は五萬と言ひ、前内務省都市計畫課長飯沼一省氏は都市議会統計より最も經濟的な都市は人口六萬内至九萬程度の都市と言つてゐる。シーアシュモア・ベーカー氏によれば都市の人口一人當りの經費は都市の人口が九萬人内外の場合に於て最小額を示すと言つてゐる。經濟的な都市必ずしも理想都市形態ではないが現在の所適正都市の限度は大體三十萬を越えない範圍に一應限定せられる様である。

昔は人口が増加し色々の施設を出来るだけ多く集める事が都市の爲であり、都市發展策の唯一のものとなし只一味に膨張擴大策を探つた。即大都市論が都市計畫の對稱であつた。學校設立に關する運動、工場誘致運動、鐵道局設置を廻つての代議士、政黨屋の介在等皆自由主義、資本主義經濟に於ける現象であり、殘草であつた。然し現在に於ては如何にして都市の膨張を阻止するか、極端に言へば如何にして都市を小さくするかと言ふ方向に向つて動きつゝあると言へるのである。古への自由主義等の態度等は許さるべきもないである。

土地と人口との配分計畫は國土計畫の一分野である。それにより究極に於ける都市の大さ、都市人口と言ふものは決定せられるのであつて、それ以上の人口の膨張は原則として認めない、従つて餘剰人口或ひはそれ以上の自然増加、移動人口は附近衛星都市に於て分散消化せねばならぬと言ふ事になる譯である。或ひは入市制限、入市許可制、建築許可制等の採用となるのである。

家族五人標準に建てた家には自らそれに適應した家具、調度、設備があるのであつてこれに五人生活する事が最も合理的であり、經濟的且快的な筈である。だからその様な家には原則として五人以上は入れないとするのである。若しもこの様な家に七人も、八人もが生活し得たとしてもそれは健全なる満足すべき生活状態ではないのであつて、此様な無理を人爲的に避けねばならぬとするのが以上の制限であり、許可制の採用なのである。もつとも同じ家族五人標準のものであつても生活様式の差、身分、財産、環境等の差によってその家具、調度、設備等も違つて来るであらうが、それは丁度政治中心都邑とか、商工業中心都邑とか、工業都市とかによつて同じく計畫人口三十萬としても、其内容に於て計畫に自ら差異を認めてゐると同様であらうと考へられる。

次に然らば最初より五十人、百人と入り得る家を設計して置いたならば如何にと言ふ事になる。即大都市はなぜいけないかと言ふ事になる。

その缺點として挙げられるものに次の様なものがある。

(イ) 市民の經濟的負擔大となる。

- i 交通費、輸送費
- ii 娯楽費、文化費
- iii 衛生費
- vi 住居費
- v 稅金 等

(ロ) 時間的浪費大となる。

- i 通勤、買物等に遠距離而も乗物に依存して往復せねばならぬ。
- ii 其他總ゆる都市機能は住居地域より相當なる距離にあるものと見ねばならぬ。

(ハ) 保健的見地よりの弊害

- i 住居地域の空氣、環境の汚濁
- ii 通勤その他交通機関による精神的、身體的過勞、危険
- iii 都市の騒音、喧噪

(ニ) 都市防衛上の缺陷大となる。

都市機能が複雑となり、それだけ都市防

衛上の脆弱性が大となる。

以上の様な缺陷、弊害にも係らず大都市の魅惑か、その膨張性は止まるべくもない。

都市の人口増加率はその都市人口の二乗に正比例すると言はれる。大なる都市程その増加率は大となる譯である。

そこに入爲的制限、掣肘の必要性が生ずるのである。

5. 立 地 論

これは高度國防國家體制の確立と言ふ國家百年の大計より割り出される。

綜合立地計畫は昭和十五年九月二十四日近衛内閣の閣議に於て決定した國土計畫設定要綱に「華麗の理想に基き、時勢の進運に對處して新東亜建設の聖業を完遂する爲には、東亜諸邦を對象とする綜合的經營計畫を樹立し、之を基準として國力の飛躍的滑張を圖るの要緊切なるものあり。即日滿支を通ずる國防國家體制の強化を計る目標として國土計畫の制を定め、地域的には満支をも含め、時間的には國家百年の將來を稽へ、產業、交通文化等の諸般の施設及人口の配分計畫を土地との關聯に於て綜合的合目的的に構成し、以て國土の綜合的保全利用開發の計畫を樹立し、一貫せる指導方針の下に時局下諸般の政策の統制的推進を圖らんとするものであるとその趣旨が明らかにされてゐる。即國土の綜合的、合理的且効率的利用開發計畫の謂ひであつて、總ゆるものは國家目的と完全に一致して期せられねばならぬ。然して又それ等の配分計畫は個々然らるものであつてはいけない。完全なる統制計畫の下にその立地は策定せられねばならぬ。總ゆる產業、企業、政策は其土地との關聯に於て再分配、再編成せられねばならぬとしてゐる。然して都市も又その重要な擔任者であり、責任者でもある。人口問題よりして都市と農村との人口配分を如何にすべきや、都市の人口構成、職業別構成を如何にすべきや、工業、産業の都市との關聯を如何にすべきや、其他住宅問題、交通問題、厚生問題、衛生問題等の處置等都市に負はされた責任は蓋し大である。

次は國土計畫の一段下部構想と見得るものに地方計畫がある。都邑計畫はその地方計畫によつて律せられるの

であると言ふ風にも考へられる。又逆に都邑計畫によつて地方計畫は運営され、その地方計畫によつて國土計畫は構想せられるのであるとも言へる。その様な見地からしても都邑計畫は強くその綜合性と企畫性とが要請せられる。その國土計畫の理念は先の近衛聲明にもある如く、日滿支を通ずるものであつたが大東亜戰爭の進展は只にそれのみに止まらず、大東亜共榮圈内すべてを勘案した所の綜合立地論、綜合計畫でなければならぬと言ふ風に發展してきたのである。只單なる個々の立地論、自給自足論では到底複雑多岐なる大東亜全般の運営、利用開拓などは望むべくもなく、況んや大東亜戰爭の完遂、高度護防國家體制の確立をやである。

6. 自給自足論

機構的にせよ、或ひは經濟的にせよ他にその一部を依存せねばならぬ所にその機能の弱體性がある。分割せられた個々が完全なる獨立性と獨自の分野とを有し、完全に自給自足し得たとしたならばその個々はもはや單なる個々ではなくして、獨自の存在價値と使命とを持つ事になるのである。現今程趨ゆる部面に於てその自給自足性と獨立性とが要求せられる時はない。

大東亜共榮圈内に於ける「アウタルキー」と言ふ大きな問題については指いて先づその一例を都市の消費面にとるならば、市民の生活必需品の内どうしても生産し得ぬものは別として、その他の一般消費物資はその都市内に於て、或ひはその都市周邊に於て生産し、加工し、自給自足すべきである。例へば人間一人一日の肉、野菜の消費量より市民全部を賄ふに足るだけの牛、豚、雞等の數量、蔬菜類の量が出る、それに必要な牧野、菜園の廣さは幾らと言ふ事かわかる譯である。従つて都市はどうしてもそれだけの土地を保有し、それだけの施設をし、その必要量を確保せねばならぬ。斯くて都市はそれ自體のみの運営、活動が可能になり、それだけ都市の脆弱性は除去せられるのである。これは生産綠地の問題ではあるが、其他電力にしろ水道にしろ、燃料にしろ、その自給自足性の要望は蓋し大である。

7. 生活計畫

都市計畫は只單なる平面計畫、街路計畫のみでは到底

複雑なる人類生存の要求を満す事は出来ない。市民の生活内容によれ、その經濟機構、配給機構、統制機構より割り出された市民生活に完全にマッチした内容計畫でなければどうしてもいけなくなつてきた。統制經濟の強化 切符制の實施、跨組組織の徹底等は必然的に都市生活の細胞單位を決めるに至つた。

都市生活の内容計畫としてその範囲を律するものに次の様なものが考へられる。

- (イ) 醫療圈
- (ロ) 配給圈
- (ハ) 通學圈
- (ニ) 娛樂圈
- (ホ) 緑地圈 (公園誘致圈)
- (ヘ) 保安圈
- (ト) 商業圈
- (チ) 郵政圈
- (リ) 信仰圈 其他

以上の様なものの勢力範囲、圈内が一應市民生活の一単位と考へられる。その生活単位の中には病院も必要であり、配給所も、小學校も、映畫館も、一般商店も（最小限にしろ）、兒童遊園地も、警察官派出所も、郵便局、電報局も必要となり、お寺、教會、日曜學校、幼稚園も必要となるであらう。以上の様な事柄がその勢力圈、範圍を形づける根據となると考へられるのである。それを生活計畫の一基準として市民生活の實際的な生活内容に食ひ込んだ計畫を立案して行かねばならぬとするのである。

交通部秀島接佐は集團住區の一単位として九百米平方、一千二百戸、六千名を一標準とした案を發表してゐる。

8. 緑地論

都市の中に公園を配置し、計畫すると言ふのではなく、逆に公園の中に、綠の中に都市を計畫すると言ふのである。都市に於ける公園綠地の存在價値はこゝに於て一躍示顯し、綜合綠地計畫即都邑計畫の如き勢を爲した。しかもその綠地は只單に市民に慰安と休養とを與へるのみのものではなくして生産綠地として益々その價値を増大するに至つた。住宅地周邊の空地は實に個々の食糧生

商店であり、都市周辺の綠地地区は市民の食糧庫となつた。

緑地の消極的、精神的役割はより積極的に、より實質的に市民生活と結びつくに至つてその綠地論も俄かにその重要性を加ふるに至つた。

VI 論

以上色々現代都邑計畫上の諸問題についてその概略を解説したが最後に然らば今後都市は如何なる傾向を迎るであらうか、と言つた様な事について述べその結びとしたい。それには再び文化と戰争との關聯性に戻らねばならぬ。現在及將來に亘つて都市は此大きな渦巻の境外に立つ事は到底出來ないであらう。

今後航空機の異状なる進歩につれて總ゆる都市機能は除々に地下潜入を開始するであらう。而して地上には只

單なる森林絲野に圍繞せられた住宅群のみが點在し、總ゆる活動、運営は地下に於て爲されると言ふ様な事になるかもしれない。然して地上に於ける表面平和な牧野風景の影には完全に變装せられた「トーチカ」高射砲陣地がなごやかな平和をあざ笑ふか如く、冷かな笑をたゞへて白日夢を貰つてゐるなんて言ふ圖が考へられるかもしれない。何れにしろ今後都市機能の分散疎開が著しく強化せられて行くであらう事は必然的に考へられる事であらう。ルードヴィツチは「かくして將來に於ては都市は相互に全く獨立せる個々の協同體 (Einzelgemeinde) の集團から建設される」と述べてゐる。

都市より處へ行く！

× × × × × × × ×

集演講會習會講習會圖書販賣本會土木第5回

四大倍版59頁 定價1.20圓(但し會員に限り1圓送料⑧領前金申込のこと)

內 容 目 次